日蓮上人一代圖會

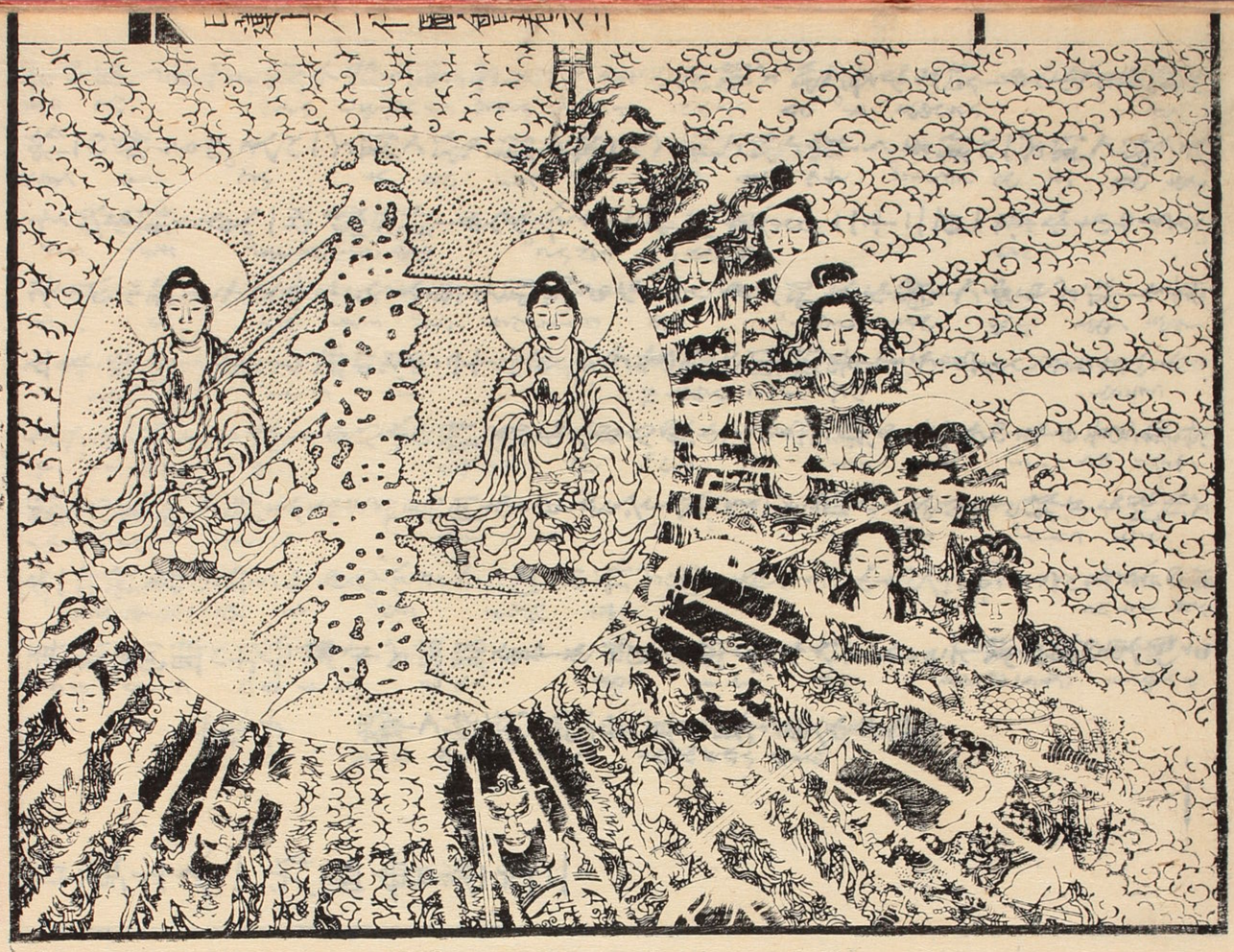
貳

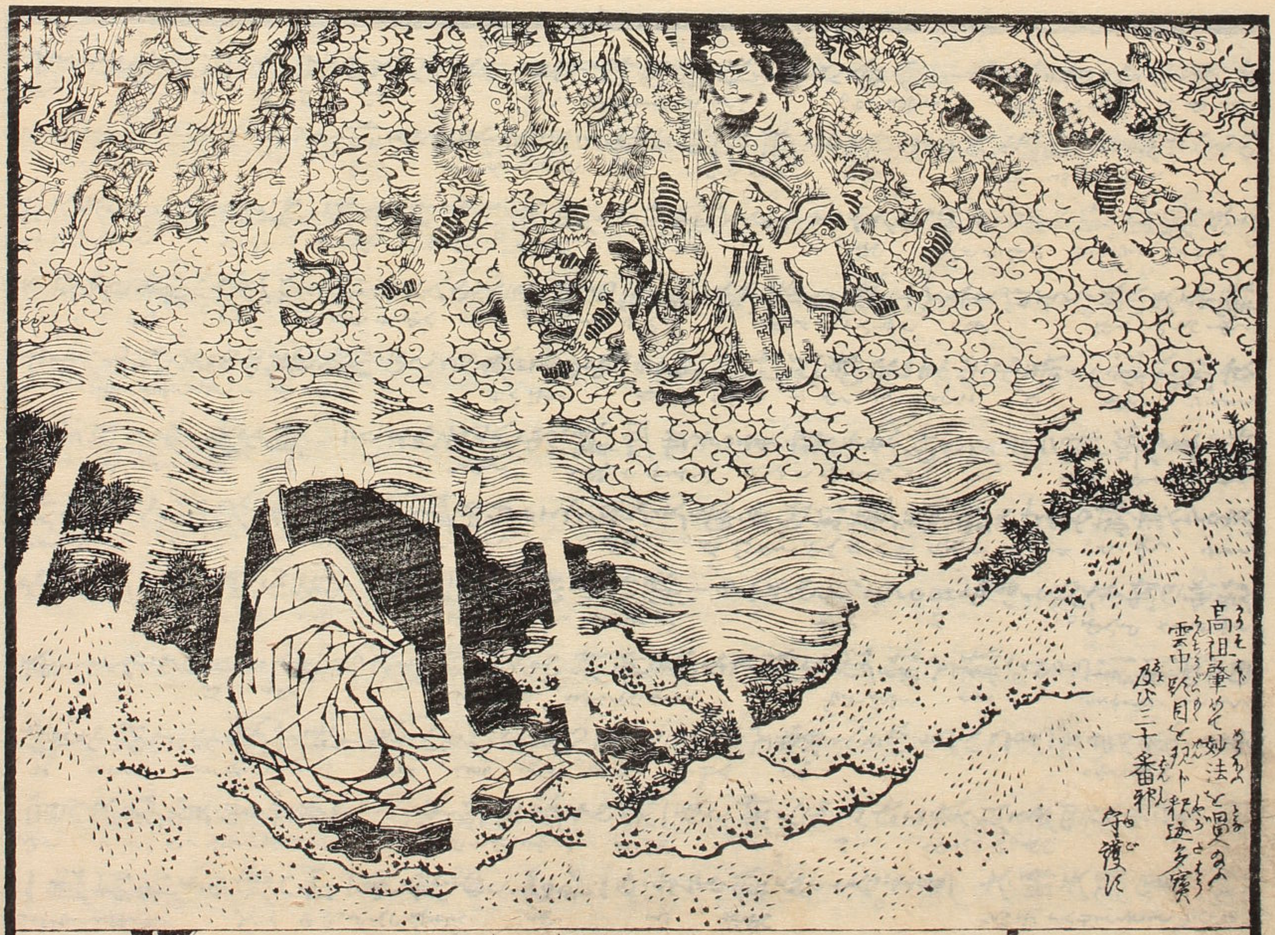
八波13
5940
2

日蓮上人一代圖會卷之二

第七　肇て妙法を唱へ且日蓮と更めの事

再び高祖の比企谷草庵に帰服ありて。暫く旅舎に在しるが。下総上総の東漸あ
ひ一切経義の在と聞くひ。今まで二回の経を閲しあひとらふとらへども。ことごとく長屋の僧
猫美津師の将来るまで異同あるもたがひに紙ひ別れを
者。東漸ちに到りあひ。勧めてこれを読ませ。その年も暮て建長
五年癸丑となる。高祖四歳二十二なり。さて暮春の頃漸畢りて。そもそもより生ひ育
安房に帰りて父母に孝養を尽ひ清流に上りあひ師友に謁して。妻帯
を処ひ経りあひ。一時熟思惟あひ。今年の仏滅度より。二千二百一歳ひあさまり。
抑一の数とは。天の一を得て以て清く地の一を得て以て寧く王侯の一を得て以て天
下の貞となせり。況や我大覚世尊の一大事の因縁を以て世に出現しあひたまふ程の




高祖肇光妙法之門
雲中眼目之打坐
及び三十番神
守護し

一道清淨。その教の唯一佛乘なり。嗚呼一の云る偉なるかな。是　太祖天照皇大神宮の久遠覺皇世尊ふかく忙無迹その授一なり。怪ふかき去ぬる庚戌夏四月廿八日。彼勢ふ給て宗廟を拜し奉つる時ふ及び云云の示現を蒙るかまびこまを食辰ことを屋。そのその日もをづきぬと清澄ちの弦佛房ふて別ふ道場を構へら是清淨潔白あて一七日この所ふ籠りあひ一念不動ふ祈願しめ。その滿ずる日ふおよび夜地の妙境恍惚として法界無礙十方通同せることを見て南無妙法蓮華經の七字赫奕たる光明を放ち中央ふ現ずる。その左右ふ釋迦世尊多寶如來佛ならびに文殊師利。弥勒菩薩坐ふ居り。逝化他方士ふ上行菩薩の四菩薩あり。この眷屬ふ文殊師利。弥勒菩薩坐ふ居り。逝化他方の弦菩薩ふ給へば王侯貴人の方ふ第氏塔婆ふて恭く厳上を奉むぐく林九天帝釋四大天王二十番神夜叉羅刹ふ衛護して伍隊をるすを実ふ神力品の説相儼然と虚空中ふ現ふまさり。程なく東方白を渡る。旭日輝き昇るを見て。光明自然七字の勢あり。高祖奇異の思ひをなす。ふて礼四拜拜しの合掌して大音聲ふ南無

妙法蓮華經と唱ふるの振聲あり。かくて十編たるり唱ふるひ安穏として坐ふ就りて起ふまを揉てかの七字の勢を畫しめふ。こを正月廿八日ことを世本弘法月二十八日と。かくて其日室内を出ひ我多年の勤行ふ因て。安上菩提の因を得たり。嬉ふ嬉ふ時刻を移さず。寂寞まひ滿ぜんと。鶏の人ふ報ぜ道場の人ふ告ぬ。究めて尊きるかんと一山の沙門ふ及ぶ。次佛ぜる信輩の長ふ集る来る中ふも地頭東條左金吾平景信も馳来て。信輩の上坐ふ在り。今や遅しと耳を敬て。所説の法ふ説ふ。と顧ふ大衆の列位珍重ふ。某甲多年の妙行ふ因り微妙の大法を示さんと。合掌ふ拜ふ。その大法ふ虚空會上七寶塔中別付屬事の一念三千ふ来の秘密ふ。南無妙法蓮華經なり。この妙法ふ大日如來阿弥陀菩薩ふ世尊ふ。いまさ其説を図ざるが故。ふ賢者の信徒ふ處を選ぶ文殊弥勒觀音菩薩ふ。この法を識ざるが故。ふ凡夫ふ授ぜるあり。抑後の五百歳一切衆生を度せんが為世尊の大義

大悲と仰て、この妙経を留めゝ給へ。遠化の菩薩に付囑し給はゝ故に、本化の菩薩と
共に本化の薩埵地より涌出し、弘経せんことを願ひ給へ。
しかのみならず、寒や来及び十方分身の諸仏をして、末法の世に当り、華
厳方等般若等の権経を捨てひて大毒蛇の如く、末法蓮華経に帰依せしめ給へ。
とりわけその使い上行菩薩、則本化の号を唱へ給へ。遠使還告と嘆時、
世に数あり。世を世に在の日、この妙法を今二千二百余年を過てまことの法を
あり。末法の我等一切衆生、この法を受持する時、元品の無明を断じ、
入らん。釈尊の本因妙の第一、本果妙の第一、法華経に悉く妙経に具足せり。我等
受持すること、自然に成仏あり。但大聲闘諍を、不惜身命の自
得ることを、嘆拉ることを、天台の未学一念三千の重宝と、
等に奪はれて、見ぬ彼が如とまた、浄土宗の邪僻、他土の教を崇
主と師と祝して、捨ることの罪、逆謗の人、法華経の泳沢仏法を

遠し。舎利弗当に知るべし。我本誓願を以て一切衆生をして我がごとく等しうして異
こと無からしめんと欲するの金言、舎利弗に告げ給へ。そもそも、「そもそもの人々」と知らず
して、強て阿鼻の業と云ふ。故に念仏間地獄の業なりと嘆じ、律宗を
業なり、三乗の業人なり、謗法の人業の地と汚して、我法華禅悦食と盗む国賊
賊と云ふべし。禅家を立つて、世を乱る不祥の邪を狐鳴して、
吼と蔑ぬ。実に天魔の所為と云ふべし。仏未然に滅めていそく、我滅度の後仏
経と用ひず、謗法の己が貌と仏人の乗と云ふ。
ときの人びと、実に天魔波旬の流なり。
そもそも世界に二仏なし。天に二つの日なく、
国に二王なし。仏に二の王なし。若し二王あらば、その
国亡びんと必せり。且己が盗賊と云ふ。天台を指て大賊と呼ぶ。ときの人こぞって
知らず。悪鬼法華経を毀謗して一切の仏祖を欺く。仏こぞって滅めていそく。地獄の
罪報汝今後何其人命終して阿鼻獄に入る。ときに於て吾いそく。念仏無間禅

天魔芝を亡ぼ淨國滅おのく邪見放逸なること今世号の金言を引て宣ふ經
明るがゆゑに悔る所多く流多し
附て云ふ天魔波旬のこと元亨釋書に按るに皇太神宮の條下に云く云云於
時神宮在天上下見海底有大日如来印文神宮怪之下鉾搜印文
其鉾滴如露迸散於是魔王波旬遥見曰此滴露成地来世必興佛
法我欲壞此乃自天而降神宮逆波旬語曰此地我之有也我忌三
寶不敢崇敬願大天莫慮也波旬便還依茲神宮内帰佛乗外拒釋
衆蓋信于波旬也云云こゝに大魔王佛法を破滅せんと欲すること
無用の辯多まこと固に據てこゝに緑の童歩に示したのこと
偖も去る集會る富山の緇素未曾有の院を空て大に騒き渠に加るに狂乱せし
年ふとも捨多らんと迷に退き撤る地獄平景信に従来淨土門を深く信じ念佛三
昧の流多りしが去ること固より大に怒り渠に發狂せしとも加る魔云とそのまゝに

出家無んと我宗の祖師に對して不孝多り走に渠が首を斬て法華經毀謗の罪に
阿鼻獄に墮るが迷き。念佛を破き魔云に已が首の地に墮る。孰か罪きを見ひ
ん。さん。憎き奏僧と刀の欄に掛しが俟要出。その魔に惜けまど渠脫に
こ衣と著たことを斬んに得ず。院を乱若に彈られて衣を脱せ俤作とる。斬
あんとおりひて走に道若が家に到り。如此とのことの人道若ぬてこゝまでいと不審
いおりひるがく。少年より深く恋せる。蓮長なるまで兵衛に陪侍て迷に心を逐
んとの人に決しぬ。彩て宮祖に景信が。奴りに鋼まてこゝを逐に是に神妙なるも東に
是を受て寺に。そ是の佛に法の為に逝を捨て我身より死命を法華經に委ね
まゝ。三数の教ならんと。縁て死の見悟り。何ぞその教を知まに辨むことなく
けん。今この寺を逐るの。遠離於塔寺の經文と自若して立のこと淨顕房義
淨房に宮祖が舊識に。とに示淨顕房義
も年始まのに然れども死を金うしてこゝに。後年の栄もあと景信師の陪侍と宮に。

過きぬるほど心中の憤怒いきどほり解やらず。語と遮ぎ絶せんと企つるも計らるべし。我堅く
トビ
ふと憂せんとをもひ密かに間道を取り。同西條華房の郷に蓮房を匿しかくす。
祖母より孫会ふ赴くんとまづ父母の家に通ふ。如此ことのよりて若別離の情を深き人。
父母受て別るを惜こと吾を猜ふ年老て再舎の期も計り難し。抑ゆゑ志操を親ずるに
倘ふもの人如く吾子ゆゑ。実に大法の至るべき五戒もまた宗を改め。今より法華経に弥陀
飯せん。と言祖父母歎びの日久遠世尊本化菩薩を勧請奉り妙経を繫げ持て父
母の項に掛へ。受持の文を唱ふること三遍。父母香を焚てこれを謝徳。善哉善哉ふ
ふる。今吾子の大徳に因て更に成佛の種を得たり。みな我師なり我が弟子なり。且日と
蓮との隔ゆゑ子を産こと。この微妙の大法を受ること。実に不可思議の佛縁なり。法
華と云て父に勧日。母に妙蓮と呼んとあるを祖母聞て。笑ふるを父母の
使者なり。霊山会上に。世尊本化の徒を頌し。日月の光明の能弦の出眞と除
くがごとし。と宣へり。弥勒菩薩本化の徒蓮華の水に在がごとく地より涌出るとい。親

の法師測られぬ。時に法華経を信ずる者遠上の行を修せ。涯
とあれば父母の大恩さまざま父母の法師と取り。今より日蓮とまうしべし。と文より辞去る
故今を出る人。父母も祝ゆゑ送らるるとぞ
按るに是より倘かの華房の青蓮房に在。この郷の地頭も念佛者なり故に
一宇の弥陀堂を造営。祖母を堂供養の導師さうんとを望むこれ外に
崇敬を加へ内に善心を抱くなり。祖母ことを知りたるも一点疑もなる
父母。既に加の堂に到りて。弥陀ことを安置の化主。教主釈尊此土の化主なり。是
無縁の弥陀に帰ゆゑ。有縁の釋迦を捨る。故に殿堂を造る。弥陀を安置
ことを人ども。かゆゑに阿鼻獄に陥べ。とて祖師怒り。彼に害を加へんと
ゆゑ。適救ふ者あり。脱れ出ることを得ず
く仏奉ることを知ず。とこの日紀年録あり。及び題書漢文をえさり。佛祖統紀且流布の中
に載せず。また言祖の父母法華経に帰。法号のと且言祖。ことより日蓮と

更めて人に。佛祖統紀の外不見の。現ゐも他宗脱漏の事

又人一本ゐそく。高祖弥陀堂の雑を避け。是より上総玉笠寺の観音堂ゐ到り一宿して。妙經演説あり。且つ今一首を弥陀の人「衆ゐ与る涙の袖ゐぬれど」とて。今日生死を死ゐ『かくて同ゐ藻ゐの領を差張るべゐ』かくて五郎時光の女人親善の義を被り。聖物彼処ゐ至りて高祖と入る。ゐ頂感感を馬ゐ跨世奉り。帰宅して竹菴を管。一七日の説法を請ふ。今藻ゐの妙光寺こまとるべしと云ふ（藻ゐ縁起）

第八　他宗の非を挙てこまを破る工藤以下祖越と云ふ事

高祖ゐまより弥金ゐ基ゐ名誉の松巻谷ゐ草菴を結び。皆くこまゐ信じ人千時華厳宗の明慧と云ふ。摧邪輪三巻を造り。専ら法然が念佛集を折く。その筆力勇猛なり。法然を指て法滅の張本。佛法の怨敵。まさに乳大蛇と云ふ。高祖ゐまと同じ人。奇なる人。今の世ゐまこかる人なるべし。然まどまこの他去も。本門の大無城

和尚。さまざまゐ六十歩百歩ゐて。天目繩を所あり。吾将ゐ一針を弄し。その病根を刺べ。と筆を採て他書しゐ。こまを守護国家論と云ふ

按ずゐ紀年録ゐ守護国家論を著しゐ人。正元元戊未。高祖三十八歳の時と。且華厳天台の学僧。おのく書を著して摧邪集を駁せとあり。明慧の他を定ゐ

かくて幽居ゐ種義あり。異書多く積りて。高祖住て閲しゐ人。教門ゐ帰りゐ。法の世間を観ずゐ上代の王は且く舎き。中古大同弘仁の二上皇（大同の平城天皇　弘仁の嵯峨天皇）空海ゐ邪法を宮て王を衰微の端を啓き。保元上皇（崇徳）ゐ流て天下乱る。史より覇人王道を棄て。武ゐ霸道ゐ走りしを今弥金ゐ元帥を置き。征夷大将軍の権を柄ども。その実は剛元帥北條氏の政を為り。是白法隠没して。悪法の現ずると。佛法を法と等しくかくを。その衰へ。所以は一なり。如来遺ゐ言を棄しゐ。この時を識ざる後五百歳爾神堅固白法隠没と説ゐて上行菩薩出現の時ゐ当まり。今弥金を

天下の邪念。法教もまさに滅し。然るに光明寺に然阿あり。極楽寺に良観あり。建長寺に道隆あり。大佛寺に隆観ありて各像法の權教を張ること。是を表伏せざれば。如来本門の妙經廢れまじ。玄来これより誤法を撰んと悉摩精進の擁を為。開權顯實の驗ある時来り。正直捨權の標を吹て三教の城郭を破ふて遂に續紀の文勢をて砕きていたづ。華嚴阿含方等般若は權教にして像法の時にこそ合へ。今末法の世に及んでは妙法の外一切衆生を濟度する經文なし。然るに各碩學の皆え是ありながら此所を得曉らず。或ひは宗祖の糟粕を嘗て地獄に堕在するを識らず。甚しきは諸寺の沙門でさその身のこころなく天下を害するの人として悉く地獄に落すべく。その罪深きなれんやと罵り。南無妙法蓮華經の七字を高声に唱ふるの然しども衆寡敵せず。一種の狂僧と謗り。敢て顧るものなし。宗祖思惟して人の現に三教の法教強く。寡をもて衆を挫ぎがたし。勸持品二十行の偈。今こそ不惜をなり。これを降さんと容易からず。若し五の大変を現じもて謗法を静めさんと便兇

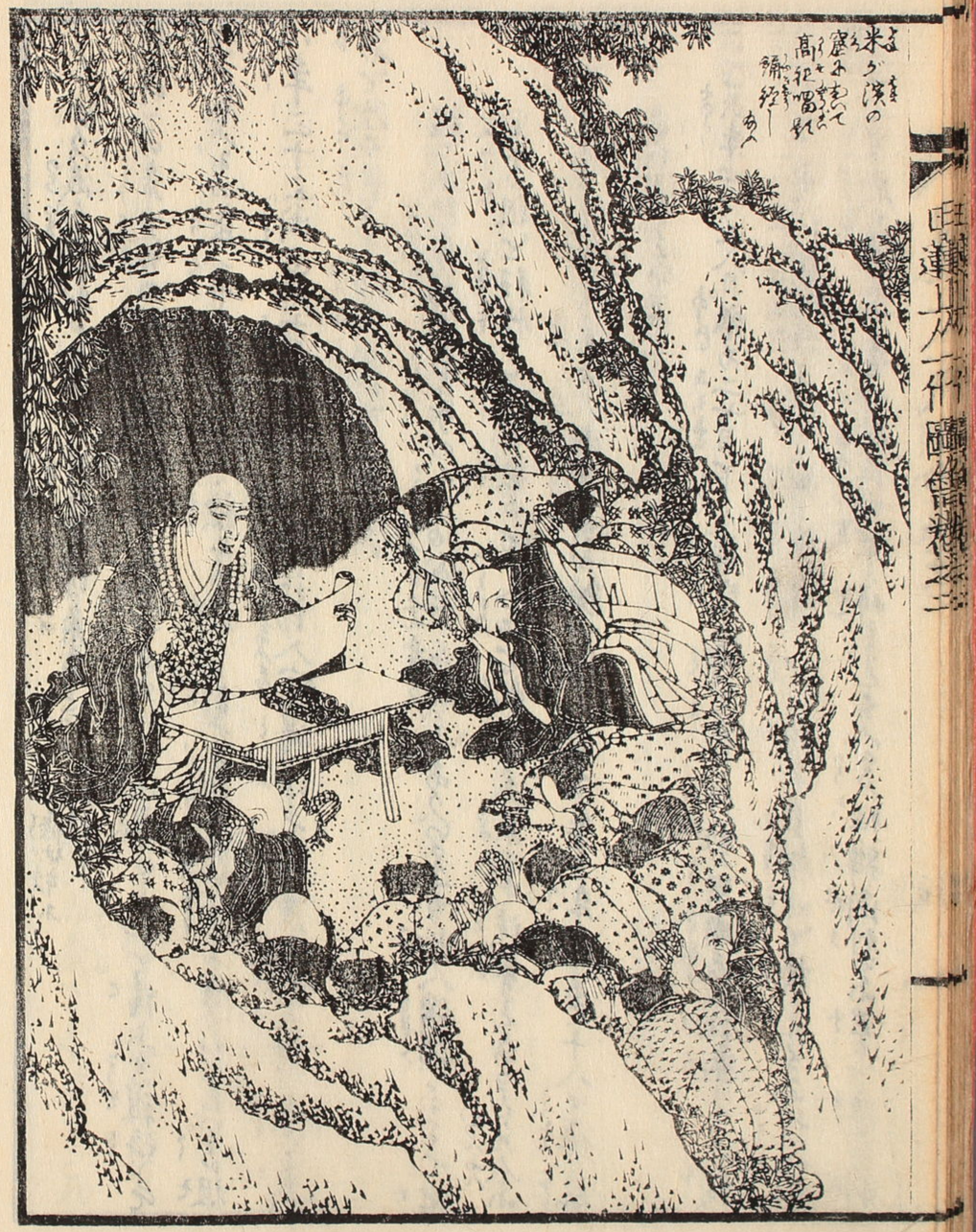
を持して守護神を召せ。守護神影のごとく響のごとく。宗祖のおに現じもの為祖こそ是ふうち對ひ。それ如来の物を化するや。必瑞相ありて現ず。吾恭くも佛教を受け。未曾有の法を説く。宜く瑞現あるべきなり。大集經に三災あり。藥師經に七難あり。雜合その數を異にすといへども所謂人衆疾疫難。他國侵逼難。自界叛逆難。星宿變怪難。日月薄蝕難。非時風雨難。過時不雨難なり。これを世に七難といふ。次第にこれが大變を現じ。法華誹謗の徒をして宜く恐怖せしむべし。これ我弘化の大瑞相。一念三千の法門ありと示しぬ。人は守護神の性く命を吹く。是より宗祖はまず勇猛に大音聲を放て四方に告るに念佛は無間地獄の業。禪は天魔波旬の説。眞言は亡國の法なり。悪鬼の邪法なり。律宗は國賊の嗚呼愚智の妄語と信じ早く念佛を捨。邪禪を除き。印契を禁じ。戒律を止めよ。我は是如来の使ひ。無上甚深の妙法を説く。この妙法の功力にあるる久遠如来の護持する所。三世諸佛の守護する所。多寶如来の證明する所。上行菩薩の傳来する所。本地久遠の妙法蓮華

經一遍び唱るときは成佛の種子を得べく一度び題を信ずるときは元品の無明を
斷ぜべし。今この大法を用ゐざして後悔するを頻りに説の人を嘆人不淵
ゐ耳を例つ。ゐ工藤左衛吾隆四條金吾頼基進士太郎若春印東氏ときを嘆
大法徒偶まる所やありん。その説をるくおりひまりて聲を祖紹とる
按るゐ紀年録ゐ四條新基進士若春工藤吾隆来まる祖紹とるりしまい康元
元西辰ゐ云る祖二十ゐ業の門とまたこの門氏孔の人花系義宗左湯つ大夫宗
仲も共ゐ祖紹とるるとうり是ゐ文と年歴相違し
まるゐ紀年録ゐ是ゐ高弥陀岡堂より鎌倉ゐ鎌ん上来駿南安谷の来
沢氏ゐ宿りゐ順風を得て乗相及来浜ゐ出る巖窟の中ゐ座し経を誦しゐ。
去て張倉ゐ入ゐ人ゐ炎を焚ゐて渇を機ゐ給て唱歌しゐ人ゐ法来忍涌を
うり云云。統紀の説と年歴異へり。まるゐ来浜ゐ着とき僧人ゐ祖を負てゐ。
洛栄慶ありてその僧人の是ゐ傷くゐる祖ときを呪しゐ即命ることを得ゐ。これ

ゐ後今ゐ知るまこの浜の栄慶角ゐとゐ
所見る

かこの年天台の僧成辨法師ゐゐ来まる祖の法華ゐを信ゐる祖許して
俗ゐ。その年甫め七十八ゐ。依その年中蓮長ゐ甲斐とゐりけまる祖
ゐ年二十二国正月吉日を擇び成辨法印入室得法ゐ。制度の式を設ゐ衣を更へ
名を改め是より辨阿闍梨日昭とゐ
按るゐ紀年録ゐ白家の言僧成弁ゐ戒とゐりゐ由此人須徳ゐまゐ。世
間ゐ祖を狂僧と謗る。然るを一人伝を死ゐ。ゐ来まる法華とゐるゐ凡人ゐ
ゐて虎せんや。実ゐ大器量余ゐ辨を候ゐ。ゐるまゐ年甫ゐ十八ゐ僧を拯

ゐ遍ゐるゐ。
さて長年四月九八日後ゐ二七日ゐ下し。厳密ゐ壇を張け。修勢宗廟及び比叡ゐ相
見の三千番神を勧請を経を繙し。祝を唱し。呪を持を貴釋門を祈ゐ。悦惚の
間ゐ宗廟及び三千番神列位儼然を舞まるゐ。ゐ祖辨阿梨ゐ来を慶せ別


米ゥ漢の
窟ホ居テ
高祖唱ヘ
彌經ヲ
誦ス

愛染明王
日輪中出現
不動明王
天照皇太神
月輪中出現

付の首領大書して供せらる。後ふこの首級と宗廟ふ納むれ石ふ彫て間の山澤ふ埋むふ墨と云。この頃池上左衛門大夫宗仲。莊ふ左衛門義宗四條と弟左衛門頼基進士太郎若春等。時く来りて教化を稟る。一時祖師ふ従ふ帰らんとして同一玉所鹿浦ふ役船を索む。所ふ富木五郎胤継い若宮の邑ふ居り強食の志富ふなくりあり。祖役船ふ乗けるゞ打ふ一言祖役船ふくらの浦と呼吟の人胤継逢ふこまとえて船中殊ふ困脈あり。かの僧を呼入て云教ふのさんとやひ。従去我ふて言祖と拓く。言祖大ふ歓びあひて。船中ふ到りあり。脱ふ纜を解ふあよび。五郎胤継言祖ふ対ひ法房い何の宗だと問ふ言祖対へて天台いまゞ宗門と定めぬ。とふ。胤継少て点頭。日蓮上人弁信出て法宗と折伏して法華の頭と唱ふるみ申こまと。如何と問ふ言祖対へて知らずと宣ふ胤継然らばその説奈何と問ふ言祖の従容として。その袖を接合せ。是仏法の本意ふ法と技て不変と守護し風雨順次法華と稱ひて一切衆生を救ふ為ふ今の世ふ偽と呼ぶ者ふ成覚と世ふの云ふ。安ふその家ふこの宗祖ふ流さん。時機相應の教へふ反ふ故ふ邪て正家を乱し。衆生を惑ふ。とふ所て日蓮深くこれを歎息。正法を説てその邪人を糾さんとすると人ども。数年流罪の難と厳ふ至らゞ。還て仏教の汚名と被り。且往悔と嘲らる。その以ふ何ふとるまゞ念仏無間堕地獄の邪法と結ぶゞ。その辯い質様と。と辯舌水の流るゞ如く。理と尽て説の人ゞ。五郎胤継終り。忽地ふ坐を避て。そ是四房い日蓮師ふ向て悉く隨喜せり。と宗教ふ帰ゞ那我ゞ。ふ向ふ那欽て在下ふ八情若実の邑ふ住て。富木胤継とふ人のあり。量らざる偶ふ寄て。この法を乗る。他日彼処を過りあり。必執事を敬ふ。とふ人歎ふ船ふ乗けれゞ。とふて狂と別ちるゞ。この所奥熱蒸ぎゞ。喉乾て渇ふ堪ぬゞ。更ふ飲へこの清泉あり。この祖機ふ寄て暫く頭目と唱へ補経一の人ゞ。清泉遠ふ涌出さり。とこ天の賜あり。と手ふ掬ゞて喫一の人。この泉今ふ竭ゞ。世人呼ゞ日蓮ふ泉と。かくて松

紫衣を帰りの人び月照寺に出て上人を迎へ。まづ其宗を恢復せんと一門の祖日昭を
招ひて法を伝へ得て帰り。翌の朝あるべき彫の瑞を生ずるなり。三数の教法一切
どもを盛んせんと必せり。と日昭法を受て上人に虔敬供養の祖日向奉るべき西偉法
の威まる所の屢異人と入ることあり。上人の謂ふて曰祖養ぜんと法華経
の威則ち有り。法華経所住の處あり。弦天畫夜護ると衛護るるを非ずんば入ること
を得じ。他宗の怪まん欽ことを他の洗に脱れ去れる正月朔旦日蝕の西日蝕の中
に生死の苦深明王現じ給へを祝く拝せり。また十五日より十七日まで月中に不動
明王天照皇宮坐を並べて。偈然ることを祝ぶく拝せり。と是法華経の仏者の他仏に
ことあらんや。と日昭因て大に感じ数りくいその相形を写して拝せんと請
ふ祖筆を染め生身愛染明王拝見正月一日日蝕之時生身不動明王
拝見自十五日至十七日 依不呪定 大日如来より日蓮に如の摘と相承二十二代建
長六年六月二十二日日蓮物併に授くと云ふ 彩画梨 日照摩くことを載く。その

年の冬十月に初め印東治郎左衛門有る夫婦来り宗を改めて法華に帰し其
男吉祥麻呂を奉りて弟子とす。この年甫めて千葉に弘て鮮肉梨を外姪なり。
祖涼く薩を加ふ。この人後に日朗上人と云ふ

按るに紀年録に下総平賀涼有国その男吉祥麻呂とあり。かくてその夜
雷鳴て堂の宇に墮ると爰の人翌日吉祥麻呂来るに祖一人云て宣
たく我と死さんのみ汝を他年大に法教を弘さんと好しめんと載る統紀
に爰のことの。進退周旋と云て巨人のやうことのことを云へり

第九　鎌倉天壇地妖　高祖岩本實相寺に入る事

建長七年乙卯。高祖三十四に成せの人倍豪氣壮健にして法宗を折伏せること雷の
やう。念仏いこと云間の業禅法い則こと魔界芸云ハ主家を喪ひ律宗い盗賊さ
ヤ日蓮い哀悲慶天魔さ如来の使なり。早く你の弥陀仏を捨て。你の戒律を捨
よと日こ毒鼓天潮に徹て。こと極楽の良観光明寺の弦阿法光明寺

の行敏なるその他碩学の智識と呼吸一時に一同に耳を欹て吹て驚き怪しみて
欠呉し十字の初に逆聲盈溢を今この妖怪を失はんは後必大害あらんと歯
を噬を眼を睜きて終に殺戮を加んとせる祖は温良恭寛にして遊行更に怖
ることなく実に獅子のごとくなりしかば地震遠ざかるあるべし一日も立ち難くべ
き年日重て康元元丙辰に至る祖は齢二十四なるべしせの人建長八十月改元
きすべく勇猛なり法氏相競ひ相呼ぶ中に半ばに和せる者ありまさに傾く
りのあり。まさに後を去降る者あり。妻は後を捨てず捨らるまじ
或は妻は兄に背き府内大に繁盛たり。この時に当て工茂吉隆茂義宗
池上宗仲四條教基進士太郎若春いよく法華の色ありと知て念仏を捨ず
頭を持て本化戴髪の男子と称せ 戴髪の男子とは剃髪 奮て死命を顧ず外護
の力を振ひ。この時に祖熱を奴僕とせるこの年二月廿九日
雷電霹靂ありて洪水あり。六月七日まさに大疫癘の社呼動を見怪みあるべし

けりと法人怨怖を懐く所に十月八日に至て大元帥軍十八紫の襲ありし
按るに頼嗣薨逝佛祖統紀に彩の如く載り。然ども頼嗣は去ぬる建長四年
職を辞し帰洛あり。あひて宗尊親王当時鎌倉の将軍なり。ちなみにおの大元帥
に今い強食に于ら況んや怨くの鎌倉ん
その翌正嘉元丁巳なる祖は齢二十六 康元二三月 天変地妖きすべく已に二月廿三日大
地震動し日を経ても猶止まず。夏に至りて猶止まず。法華一国に異魔起せり。これ経に云ふ遍
時風雨疫あり。五月十八日の時に大地震あつて民屋を壊す。陰陽師の祈晴験なし
ちて占ひ申すに曰を告ぐ。八月朔日もまさに大地震二十三日もまさに地震。神祇も推
けんとせし神社仏閣に破壊し山嶽崩れ大地裂てその名まさに火炎涌出す。九月
四日もまさに地震。まさに牧十月小動止む。かく天地の変に遭て稲穀更に登らざる
む。国中一同飢饉なり 稲穀の登らざるは茅蔬の熟せざるを饉という 四民食物を失ひ飢餓に遇る。これ偏に日
蓮法師の毒鼓を唱へ邪を責めふ天の誡なりとて怪を刀杖を企て怨を殺せん

と計り。或ひは将軍執権の後家尼人の如性を訴へこまを熟らんと練るとりへども。
宮人なりたが故ありまとも恨いむ。まこと宗門の法方なる祖は是皆の天災地妖
も。さぐ傷法の誡めなり。早く邪義を退けざれば。こまを備らる大変あらんと云ひ続
ひ自若として更に動せず。平義田斐源氏新羅三郎義光の後胤なり。波木井云
郎実長は性素朴敏にして学を好む。且その志佛乗にあり。在京義宗の縁者な
るが。常所領会に来宿せり。この所にて在京にても数回会合して世々と禅を尋ね
佛法の秘に及ぶ。在京義宗のひとりなり。抑佛法の実とは唯一乗の法華経のこと
己を言ふことを曉れり。法華は即天台の教を伝へ偏に佛を汚したりの
ひて。佛の実は本化なり。とのひは実長不審あるにその本化とは何方に在や。義
宗對へて遠きにあらず。松葉谷に坐すのみ。こを内房の大士なり。上行菩薩佛讃に
到ひとりに出現ましますなり。牧委ねく知らんと要せば工藤池上等に問へ。多地頼
ひと教ふべし。とに於て波木井実長一月池上工藤に会て。義宗がこと云へる工藤を

池上大夫所に義宗が言のまま。我に隨喜渇仰せり。然れども今の所勢。勧持品に漢の況味
に強げまこと我ども。密に所望と誘のこと。足下も示さ得べ。と問て実長微服にて松葉
谷に往て言ふ祖に問ひとえ屋その説法を聞大に感悟せるとあり。在に已が禅宗を捨て。
本化に帰一言祖を師とせ。後年鬼延山の大檀越なりかくて正嘉二年戊午。高祖
三十七にあたりの。二月十四日のとき。父妙日居士頓に卒ぬと房州より若来る高
祖その訃を聞て天に仰ぎ地に伏して絶倒の。日昭あよび在京人と抱き起す。
将来を級と二日にあよび。当て故に人性と宣ふ。人皆驚て人ぞ。今弘法半に及べこの
地を棄て性なり。法敬皆その陣を伺ひこの菴も保べ。且路次のみども学人来り。孰
に止まりの人と切ひ人と強ひ人。既て鱗閑梨日昭を右。そ是孝は面の基なり佛も説
て誡めとこと。今父の喪に遺てこまを忽にまべ。用て汝を補處位に充とさ衆人
を顧とのひ今より後日昭を以ると。我と云るぶめくせよ。然あらば遠処に経あ。と示さ
まこと。この領掌を言祖そまより房に到り。喪を修すること二百日。加るに母を慰め

高祖
南安谷ヲ
遊浪ヲ鎮め
法人大ヲ
敗伏

伊東朝高
重病ヲ優ス
高岡犯罪持ノ
ヲ平紅快ス

志を絶つ。ゆゑに修喪の服あるとき一代大意抄一篇を撰。一代の先考の冥福を薦め。一代門下の新発意を接くとぞ。かくて強食人飯りの人南云谷の住る泉澤攝政ゲ絃を宿まで。かくて船を乗んとまるを逆浪吹く纜を解かしめ。この内に祖母を登り兄を持つ。ゆゑに船を不測の風遠を流て海上まで平穏あり。船人及び俗人皆感嘆を威服を威ず。攝政及びその妻子人帰依して宗を更む。これ持兄法華塚を樹今猶存在せりとぞ

按ずるに紀年録。南云谷の泉澤氏の。年歴及び事実と合ず。但順風を得て。東相模米濱に到るとぞ。逆浪船を防ぐのことをいたべし。まことに巖窟に入て補陀のことあり。また法華塚の泉澤氏及び子二人出法を敗しるともいえども今佛祖統紀に後に

さて其年の冬れ正元元己未 北方改元 宇祖二十八歳世を去る。疫疾いまだ止ず隙て死せるもの五路に充り。とりわけ十四五の小尼あり。出て人の尸を喰ふ。旅人驚き怪そ。ときを逐へば忽隠ぬ。古今未曾有の珍事なるまた。生徒忽怖せぎるなり

按ずるに本朝通紀後編巻之八に曰く。正元元年春疫癘飢饉その細書に。天下大飢饉餓殍満街時京中有十四五小尼取食死人経月不知行方とぞ

尋で盜賊火災数り。ときを宮に祈るの御ときを醍を列ぬ。八月災異あり。

未穀まず。く拂底。牛馬巷に斃れ骸骨路を塞ぐ。疫病行われて百姓死せる去半に過ぐ。ときの人衆疫疫あり。また九月二十八日に戊刻に彗つて熒惑星南斗を犯す。のち大流星長四丈許乾より巽に飛ぶ。その聲雷のごと。昼星宿変怪あり

冬も雷のごと。昼星宿変怪あり

周礼に熒惑星に火曜あり。和名和左波比保之とぞ。登壇必究に熒惑八方伯の象あり。常に十月を以て大微に入る。勅を受て出て列宿を行き。長道我

同月出入常々云々夏至の夜半に箕斗の交に中て六月の昏に牛女の交に
出とこそ。まこと流星の和名異波比保之漢書の考義に迦と紀て去ると飛星と
いひ光の迹相連なると流星とつく。まこと二名奔星とつく。史記の劉向が傳に云く。
妖ある者と天狗星とつく。妖ある者と天狗星とつく。妖ある者と雜組に云く云々。その墮るの
地に兵と主る云云。まこと流星を見る以て不吉とし。未古の遺禁にこそ。日本
紀舒明天皇九年二月十日流星あり。その光地夷の兵あり云々と云々
山妖の象と世り。今壹岐の爲に畧書に
こゝに於て強盜の黠族大に起りて世を惑す。強宗の僧等壇を設け。經を誦して
穴ひと穰ふる祖いまを初めざる其似たり。後に岩本の寺相ちに出た。その大
義に入の抑岩本の大藏に爲に智證大師入唐のとき藏經二本を將來して。
三井岩本に納めり。三井に治承中兵燹の時。伽藍と俱に燒亡し。唯岩本の藏
のこり。蓋高祖の入義に遠因ともみる。近因にして強修行の爲のこゝろねど。天変地

妖に謗法の罪なるとりて時のまを。拙わん爲に彩ありしとぞこゝに實相寺の學頭に。
智海法師とつかまりて。爲祖が住名の緣を。遠因未係を。僥倖に。止觀の緣を
請ふに爲祖更に辭をまねび別講延を開くとけまべ山中の寂法とに集會し
耳を澄して聽聞を。漢不爲祖法華毒の說を法華化別付囑の儀を。佛云聞に
四箇の云云憚る處なく說き人に。衆徒等大に怒るもあり。まこと惡口を惜むもあり。
まこと。その才の美なるを讃て。その說を感ずるもあり。各宗中異なる中に學問智海に
殊さらに大歡喜を發し。謹でこゝを傳受。既に宗を更めて爲祖の法華こそと
思へ。まこと卿憚る所なれども。まこと沙弥伯者をして市縄に結せ
けり。こゝを白蓮阿闍梨日興なり。爲に紫十四とこそ。その聖文嘉元庚申云爾日及び
彼岸の日に殺生一切禁斷せ也。這の副元帥に條時私に佛來に飯をふるこれを
法に令まる。その令の例に。そもそも會獄魚鼈の數に命を重ずるこゝに安に
。凡に人倫に月日こゝに慢に殺生をこそと。罪業を見ざる者。故に佛教の戒や惟

重く聖人の格式炳焉なり。然るに因て件の月に江海に魚網を禁じ山林に狩猟を停むるの令あり。若違犯輩あらば家人に交名を注し凡下の輩に罪科に處すべし。

法忍の守護なるべきに地頭。この事を令得べし。但神社の祭に至ては制の限にあらざるなり。

と云云。この事東鑑に見えたり。令祖この年三十九大師の考證も既に畢り伯者と伴ひて孫答に帰り有る男吉祥麻呂栄十六にあり。ここに薩摩守殿。

そその式を以て日蓮と大国と沙弥伯者もこの所に来て更に剃髪色。

緯と日興白蓮と字をかくと令祖に名帖を。巖窟の中に在りて五三安国論を撰

しめ今この延寺を立て妙法山安国寺と号へ

第十　立正安國論を呈し并高祖面前時頼を諫める事

嗣祖令祖に安国論を撰畢りまつりを大学三郎能忠に出さんと別に

突鼎退治書を撰ぶを遠の専ら洋土を折くの書へこの二年と懐みて能忠に等に

ひき。家道沙門の名をうとくと人びと。幸土の涙をうるを三位入道祭るに名を天変地妖屢に

あらはれて正法ほろびて天地の変とこれを人びと法華誘法の罪によりて。故に今の書を元仰

に奉り。国家の災妖を穏ん。ここに不ましく熟慎の。然るに剛元仰を弥めるべしと出

あり。能忠これを戴き投ぜんとを点検をるに究めて。その理顕然なるを。猶

中疑惑を抱き。剛宗教を問ふに。能忠令祖まさに十法界明因果抄唱法華題

目鈔を造り。他日これを見せるに能忠忽地に悟入をる。則ち九拝。この時傷を

捨て仏に入り。戴髪の弟子と称をる。祖に門戒を授けるに又これを推て日学と

呼ぶ日学老母あり。その年八十令祖を拝し。落髪して妙本と唱ふ日学大に喜

びの。侍に供をる。墨先考光禄能員法華長

興且はその帰。若狭の局が冥福に薦とこの人る。令祖の訪ひこの堂に我敬恵

地の兆あり。今日の檀越に文と長興母に妙本。豈偶然ならざるや。長く末法万年

の法雲を興こして一閻浮提妙法の根本。廣宣流布の盛観あり。因て長興山妙本寺

と号へんとこれを宣ふ。能本の日学大に喜ぶ。然れども世に憚るべき秘して顕に

人ハ信ぜず。さてこの立正安国論文義実ハ質直ニ。精妙奇中の奇なりとゝ人ども。在ハ今い官途ハあり。且傷たるとゝ。已ゝ勧めゞ。古人も若と又ハ揚ざるハ若ハ
ハあゝゞとゝ人ゝとあり。在ハ霸ハ学ハあい師自身とまを持。蒙昭寺社職ある宿
房入ゝ光則ハ統と平あいんハ誰ら異論とまゝうすべき中とハ他人とゝて出ゝいんハ勝る
べゝと。ゝて高祖い領さゝゝ則宿房入ゝ光則弟子ハ速ハ
副元帥。時頼ゝたハ達ゝべゝと異議もゝくゝひるまゝゝ祖い辞ゝて帰りゝハ抑立
正安国論い治ハ平天ハの要用ゝ。今印ハ世ハ行ゝるゝ。その大器ハ金光明経大
集経薬師経の七経の文と引き今現ハこの経ゝるゝハ誹法の罪報ゝ。ゝまゝ法を
謗り退まゝば法天善神ハ方ハ向ひ。その境忽魔界とゝゝん。若ハまゝゝ我法の滅
よゝるとゝて擁護せざまゝば。その国ハの不祥あゝゞ一ゝい仇僅ゝて数年ハ二ゝ
革こゝハ疫病交発ゝて国窮ゝゝと仁王経ハもとゝゝるゝと説く。蓋その文ハ要ゝる
ゝ。爰時佛閣魔と連れ経ゝい軒を並べ偏い竹葦のごゝゝとゝ人ども。その偏編

曲ハ人倫を紊乱ゝ人倫を紊乱ゝ邪正を辨ぜず。乱中を代の法然捨閉閣
抛の教と立て法華経を無用のものとゝ。その罪の重き。彼のゝくの宗門等ハ天下
ハ蔓り人ゝとゝ信ぜゝハ行ゝ善神遠散魔ゝハ入摂ゝて種ゝの妖ゝとゝ
りのゝり故ハ国家の平安と欲せば浄土宗ハ禅と断一乗の法華ハ破ゝ。
我ゝる時ハ災難消除天下泰平ゝゝ。と問答ハ象りて深理と竭ゝ。伸ゝ人
ゝ信切ゝり時頼ゝゝと熟慮。心中ハ思ハ思ハ決ゝ。その後沙汰もあゝざりゝ。
日と経ゝる祖と鮫ハ五人ゝ祖徐ゝとゝ人ゝ時教ゝ出ゝ問答ゝ時教ゝ
安国論の大意ハ問ゝ言祖ハ捨食ゝ国家ハ興らんとゝゝ必ゝ
狭祥ハ家ハ亡びんとゝゝ妖孽あり。ゝと念仏ハ無間の業禅
宗ハ天魔の所業ゝ。真言ハ亡国の法律宗ハ国の賊ゝ。ゝ真言
ハ上下ゝゝハ共ゝゝの独ゝゝと知ゝ。ゝ国家亡びんとゝゝ妖孽あるの本
私ハ今この独宗と穢ひ除き我法華ハ敬ゝ人開ゝ用ゝ人ゝゝ月日と経ゝハ

ゐ。自界叛逆他國侵逼尋で亡らんと必せり。今日蓮我と立て他宗と情を偏執
とりてかくやうに云ふなり。彼人不信奉るとその誡め至切不一夢不
人ゐたゞ不。時頼父終まりその凶彈不敢さるとりて人中十二分の志あるとて論ふ
べき力もあるべしと不於て凍結と陳ずと雖を入不り。仮不副元帥が威勢経倫き
処不居絶ず人を笑ひ人の上不視て高くく振せるまつ。或ひは色心戒慄されども
祖は猶自若として畏るる人もなし。我誡めの宿らざると人不欲見して倫
と。鉢と遁さの人は顧て変と揚。他日大元蒙古紙幣来る時不ゑらば国
執権と今の度不似ざらん。他を侵逼経は蒙古紙なり。嗚呼殆ひうの殆ひうぞ世
所と云ふ人是と大誡三ヶ月の一ヶ月

按ずるに紀年録に云く。文應元庚申。この祖は年三十九。疫病いまだ癒ざず。二月
この祖災と稽ふと紀す。八月法界周果と著す。法界明周果
法界明周果
沙門日蓮と問ふ。十月弦日南條兵衛尉が家に移る。

六月書成て云ふ。この書は祖大学三郎に与ふ。この書は
周果鈔の他に唱法華題目鈔あり。右の唱題鈔いまの界の下。然る時に南
條兵衛尉と大学三郎の両人に與へらるるなり

第十一　賊徒松葉谷夜討並高祖當果常忍が第に到り給ふ事

この祖は正安元年に擬し。剛元帥時頼に呈せ給ふ。その後に一回面謁ありけれども文
より何の沙汰なかりしかば。面謁の記念佛堂を悪く彼人の坐に在ある人なり。
さて耳を驚す。執権の怒りとなる。深く怪と心を。寄せ給ふ。退きて後
そのことを稟くに云ひ置き。佛法深理の強いなれども。安時執権に彈に帰依して。その法
と信じ奉に天魔波旬の法なりと。頑むに実に狂乱の所為なり。然れども世に云ふ
怪むべき人の常なり。果に無きを者もあるべし。かくて次第に蔓らば。佛法を弾の街とかん。
嗟哉と。乱彈を。殊に小條氏重内に深くもとを惜むの心。奈何とも法方
なりけまじ。頻に云ふ祖を毀謗す。眷属の安否に胸に焼を。その家を推量り。縁あれ

高祖教を
聞き
石窟に
隠れ給ふ

逆花松葉
谷の草菴を
焼討かけ

かしと思ひければ。弦宗も共に侍人等。父祖の讎にも弥増て。その痛心骨に透り。共に天の開べき。殺してその根を断んと企つれども。後難の恐あるにあらざれば。執権の連枝といひ。しかも当時貴んぜらる。重時の庇に便りてこの上内々謀らんに果すべきも太く怨むが故。その上の心易かれ。彼の狂僧を害しうしても。無後難のあべきぞ。後この上は在下等。よろしく計らんとまたとりしが。ざりければ少しの恐もあらじと同志の族を語らひ。いつれもかくと其まる其数百人に及びけり。都て京の章郡が。戯ましに遊びする狗の小屋めいし松葉谷の草庵を踏砕くこと。掌を返さるより易からんと。勇み進んで押寄る。比しも八月二十七日。まざるの刻の程なれば。月さへ出ざる暗き夜に。かの草庵の前後左右を十重に押取り捲き。垣を壊し戸を破る。庵中に在る人々は。何事と驚き出るには。炬火数多燃し連ね。或は太刀を持兵杖を携へ。弥が上に寄来るなぞ。夫れ三数の法敵ども寇ざるぞに驚ひも。その者なればおくれは見せじと。節今宵は進士若者とて宿しておりけれ。腰刀を引抜て。多勢が中に踊り入り。縦横に斬てまはれば。辺に続きて能登房も。

こと先途と防ぐるが。この乱妨に六に耗り。殊に敵は大勢なり。切まども突ども絶ぬも甘ば。押重りて攻入るにぞ。この両人も防ぎ難く。弦枚多に深疵を負てんなるども引退く。その間に法敵ども。草庵に火を放つ折しも風の烈しくて。炎火十方に散乱し。黒煙天を焦しければ。冬なる折も取敢ず。逃て道に出る高祖も。論しと此処を出給ひその傍に山ある処に石窟のあるに俳佪まずそこに入るなり。法敵等は草庵を焼たる祖の迯去玉ひぬと察し。ここと並きく索めれども。終にかの石窟を知らざれば。逸早くも何方へか逃給ひしと探し案煩て。夜の明るに至る所にひき取ける。高祖は石窟に隠れ玉ひ。心静に妙法を誦経して在しけるに。夜は既に明はなれどこの鷲ぎに今こは散りに逃失て。朝餉を進らするものもなく。奈何にと坊ら人もなき折から山中の猿群来りて鳴ほどす。果を捧げければ。高祖歓びてこれを受。その飢を凌ぎ玉ひ。猿は山王の使令なれば法華の行者を救ふる。かの猿の仕計らひと。むかし叡山に在しの時神慧を得ることを少なからば今またこれに落て化を救く。掛せぐんばあるべからざるぞと

誓く念誦呪願の人後この地不一精舎を建神徳不朽ならん。信濃国山法性寺とこそ
称て弟子と出家の下総の方不技を東人富本弥太郎が鍛冶の人弥太郎大不歎びて
崇敬せるを他日不信を頓て宅の傍不一卅菴を造て奉らせ朝暮所生の孔
雀明王と祖師を威ドまひ自一尊四菩薩の像を彫て此処不安置し法華堂と
号らせ二百日の繁延を用き人今の中山法華経寺とまうす弥太郎入則中山第二世
日常上人と称しこの時不出て勇谷教信太田乗明秋元太郎宗と改めて戒を
受く弥太郎祖師を入多の子一尊四菩薩及び大黒神を自刻を供人の生を免れ
の兄弟母神を刻を所不安置せり　また寂静品の説相大不二幅大
黒天の像を画く画ゆきを妙と浮ぬひ今中山の宝物なり

扨る不佛祖統紀二十四不いはく進士若春松茶谷不止宿し法教を防ぐ若此人
在ざりせば弘危なるとひ能登房麻を被る祖若密不語る若春堅護す
敗不人三数退去若春が勇猛人今を神と為今不逸るを進士の家繁不とそ

えり。ちうまたび蒙下嫌を信しい能登房一人なりん。この能登房のことい
その佛を尊人と紀年録不云〇若若教信い戒を禁て自礼とふそのゆ典
宗い山城入道と号し父の志を継て力をこの祖不弱をと云〇太田乗明い去嘉
とう人。源三位頼政の裔なり。頼政怪鳥を射る賞不ふて丹後不国の荘太田
城を賜ふ。孫この故不太田と氏と仕云。富本弥太郎妻い乗明の姉なり。俱不富
祖不帰依。その男太郎と仕て富祖不投ぜ。帥阿闍梨日高と呼ぶ。乗明老後丈
帰別居し。館内を嘗を張不加茶沙を著。俗名を汲て道蹲と云。高祖
尼を美しと毎不来明上人と称しいの。弘安六癸未年月十六日逝去。寿七十云
と云〇秋元太郎兵衛尉不仕白井村不住。法華堂を建て祖不弱。会
佛を尊て檀越とす。従来富本の屋家なり。今白井の秋元寺是なり盂蘭
と牛と和訓をぶるとのて中古誤て牛の字と仕とり

第十二　大祝兼益神道傳授并高祖伊東へ配謫の事

其翌改元ありて弘長元年となる。高祖四十ならせ給ふ。熟思惟ましますやう三毒の敎
縁しての佛讖実に寄るなる我具に勅持品二十行の偈を受持せんと欲も。然に是
天照皇太神宮久成世尊の垂迹となす。再び宗廟を拝してこれを謝せんと乃辯阿
闍梨を召ていはく。他日三歳捧施せば高祖安房の脚を得ず。今伊勢に詣んと欲ふ汝
よく迹を護よと。辯阿闍梨謹で領承し依て高祖杖を曳て勢州に至て浄明寺に
到り。三七日修法しあるに神は本土に在て宮中空虚なり

按るに神は本土に在て宮中空虚となる。玄弥无量の佛號あらん。不幸にして
いまだ穢にぞ悩みをもてとまといへど。ただ伊勢は本朝の宗廟倭姫命神託を
稟て。敷浪よする伊勢の國に鎮坐ありしより世のあらん限り動かざるの神居なるを。
本土とは何方にか。蓋佛説に久成世尊の垂迹とらへ時は則本地は久成世尊にて。
その本土は浄土なり。さればこの時天照太神浄土へ往のみならんや。識者の辯を希ふ
高祖大に歎ずるの嗟何ぞこの日ぞ廣宣流布の時を得て法倶に一たび清浄の眉を突れ。

神の本懐を満足せん。蓮祖王癡ざまぶ云を食ど大書の題目度こそ神徳に供せ
らる則こ此を云のは堂下まで妙見大士出現せるとあり

按るにこのの説書にも見えて今佛祖統紀に按て紀も。但世の流布の本に路
めに伊勢宗廟のことより東大寺造立に依て行基僧正の事を記。且光寺秋
ないは所の神託を記て云云。孫るにいつの比よりか。枝ぞそれまてりて神は沙門とあいせ
ずして偽命をさしりと雖ざてんを付ぞさまざまありの日本の宗廟又は其ころ荒木田
一流の神主あまぶ其聖人こそにまるかの山浄明寺と當坊より。従来法縁の
寺にて在ととさざ。題目を共うおきまへ聖人宗旨歸依の安房國東條郷。
天照大神の御厨にて本化の法門をもちわらまい今又伊勢にまい入り。題目をたてし垂
まるるはいまだ入身めべし。此消息にいはく。建長五年四月廿八日安房國長狭郡の内東
條の御厨。今は郡なり。天照大神の御厨なり。右大将家の立始給ひし日本第二の御厨。今は日
本第一也此郡の内清澄寺と云寺の諸佛坊の持佛堂の南面にして午の時に此法門申

抑々今は昔十年云云予云云淨州なるの石塔婆を見れば人不平長一丈横巾戻さ
四寸。經の字不明なり世人住持かなくく日蓮聖人此ちを百日遠流あり太神宮
日蓮あり。天竺にこゞくく生ざるこの人事佛人なりと云云。とまれこれこの事実なるを申辨
トがて。さて建長五年四月廿八日。清澄寺にて鋒めて法華の題目を唱へ始めこと。
統紀の説を見るに。この間住勢へ住多人なれども石を動この人とは云ふ住持かさらく
百日遠流。太神宮へ日蓮あり。建長二年のことなるべし。なるを大書の見
月慶こそ神徒を供ずとある。長右衛門の石を動めるを。但彼処の注来張繰の
落とをひて神徒を供ずることといふ。是を以ふの多まる張繰ものん
去ぬる武士恩田の氏厨。太神宮の神供あり。その説を益ずとあり。日昭この人を因事。
祖遠田吉田を供ず。本朝天地人佛来の神教と同人なるか。かの益ずの状を張り持て吉田を
ふ到りぬ。吉田大祝義長。この状を見て異議を及ぶ出て云祖を對面。拾て書を出て
續ものを云祖墳のひてことと解ひて。兼益を拾て大を強き名を神を
と学びしを拾て。拾て怜悧の漢なりとも。年と經て学ぶとなれば。その人とを不ものがたりの究て
凡人なるべしとまさ書と出て授けさり。云祖墳のひてことと解ひて。兼益を拾て
益いよく驚嘆して神を の口決家の秘書を。佛人なり。云祖を不領掌あり。けらざりを
神教の深妙。宜なるを一往を土更を動ざるとの。今この佛をよりてことと知る。
況やまさ大乗の有縁なる世なることを。別是と共ことを云人を賞下義
益一書と進を。辨因利を日昭を繕るその書を問いて。弘長元年二月九日。法華行者日
蓮法師入来。依神領武州恩田御厨代官益行口入去年以来連連通達畢此
人立妙經時節現當法門作書籍名安國論顕学無雙之人神代降臨三十
二神名號之事懇望之間舊冬注遺之件神號字訓讀様為傳授今日来
臨此事神道行法之秘號也。於凡人者輙不相傳之儀也。然此人極一代藏経之
才覚頗異人之間不涙思惟令授與件秘訓等畢以上と強めて繕らまるり。云祖教び
なるべしと

按るに此の一條紀年録と大に異なり。かの書には弘長元二月。爲祖武蔵国に流罪せらるゝ。右
田の大夫兼益等、祝益房の家に来り。爲祖を殺さんと。然れども祝の奚松と問答し。益
いたく。右衛門の他つの他とゆさぶる。右衛門は所存。爲祖遂に強食に
なりのべ。その陰書に国武蔵の国に於て。右田八郎の東に来り。兼益は茂原に祝氏大
織冠の裔と。兼益同等に兼益紀に云。とこたえり。世間流布の本には
右衛門尉兼益と云。爲祖に逆に武蔵の国に到り。人間に
久しきに紀年録の説なくば非なり。人氏統紀とは。案ずるに。この時再び伊勢に流
豫て益行が祈願の書を。藤原上総に。右田に到り。その事実怪しに似たり。
爲祖孫舎に帰るべし。辨聞梨日昭元のやく松葉谷に庵を構へ。その帰庵と候へ。
爲祖を入れ。問の雅に曰。懲ざるべく。狂妙法と唱へ他宗を破し。毒鼓裏に逆風組こと。
故に。とを敵対の邪を勇猛と感。説に敵伏に降るの若干あり。四條北基池上宗仲。
工藤左衛門尉と。爲志と変じ。躬を奮て供給せり。とに。極楽寺の良観房。とを惜むこと。

為。実に先師堂と結び。この庵を焼討せもの。伯父密計あり。に。早くも。爲祖人逃れ
のひ。安房平穏に坐せ。執念くも。とを。焼こ。己が種族ある。心條氏重時に。紀人買宝寺
強弥とを構へ。重時。その任所府朝に在て。その任重き人なれば。第機の理。孔孝に。
良観が説を容るゝ人ども。時を。強いまだ果さず。その子長時に執権を。時に。朝に。
に副帥の職に加り。頗る威権他に超り。良観を。僥倖に。頻りに。強を。
を。父と孫。とを。爲祖を。正元。八月十二日。夏。伊東に配流。
朝日興の輩。に。に。別と。情を。友吏に。対ひ。弦共に。配所に。
に。流人に。侵害を。許さず。この民。恢ひ。に。の。の。三個に。爲祖の。
推。浮。に。別を。惜む。爲祖も。渠。が。実。を。感。衣の袖を。彼。
宣。志。に。に。に。に。に。に。に。に。に。に。に。
時。に。に。に。に。に。に。に。に。に。に。に。
式。に。に。に。に。に。に。に。に。に。に。に。

者と法を授せる者とを宥めこの如来の使法華経の行者として遠流不敢さむらい実不天魔の所為なり。未来罪業尽未来際今法華経を別て恵びたまいしこの人ども。むしろ然る例あり。三河入道寂照が麓山に住人とせしときその母別を惜きくるを寂照こを武蔵めて山海遠く隔つれども月天地の間なり月毎山に入て我が麓山に在と思さまを上月の東方に出るとうたがい我母日本に在と思べしとひとりゐん今ゐる師匠のうへに有。と読しかるその間に天や私に乗を時涙をおとして近辺の官人等情もあるを遠しまるる祖父容しと私に乗を舟を揖取帆を捧て大洋へ漕出る三個の人の法に轉び涙と老て悲しむその伴工茂池上以下。老若男女汀にたちつらなる落涙合掌し帆影に望まで目送り家路に休て帰りけり。史より辯聞梨日脈は松葉谷の庵に帰り師の在一日に加て千。粛々儼然として志を動かさず。妙法の勤め慇懃なり

第十三　朝高妙法に帰す并高祖日輪中の三菩薩開眼の事

かくて風濤穏に日ごとに月浦に著ひ蓮華寺と造り三河名の法に

あるこに不その浦の私守に法華経を人者あり。かるを王に人とあり元来陋しき業を者
なれど世と渡る所に有ましべ。者儀の教化も受しとく。不得本納ありけるとて史帰とも志
いまさ孫らうるる去に。嫌て必ず日蓮大士と左辻と心に情く日毎に食を調へて敬ひ
冊さうけたびる祖もまことと紛し。遠まりの人と三十余日。年化の正法を化度ものに一文
不和の徒しさ所に。人に伝を乗ねたびに自然通暁しこの大法を得るに。かくて
六月十七日。伊東八郎左衛門朝高ひとの荘司ある故僅に小さき廬を補ひ乗れに
る祖と従いまとその僕として給仕せむ。為てこの法に帰依に在て
ことこと必て悔むに今眼に対に及びて。ひとく言祖を恭して色を罵ることを
法に遇う。然るに伊東朝高ひこの比を病を稟て。地に死んと臥薬効
を処の験者。此処の僧とこの法を信に必ず受る人に死して彩霞更に蘇られど一点ばかりも
験を得ず今に不死。あの命も且久に過ぬ。常に綾部正清に伊東の親族に有りぬ。
深く嘆きその病ひ一朝のことに有ましべ六月に人頼せ三十日蓮法師に伝人さく法華経の

が者とも彼信敬る所も念佛を云間とらひ禪を天魔波旬と云仏祖を罵る所も終わりの花の悟を得て人道さとりとらへど。法華いまの末の世に法中の法とも成べく。然るべきを修する去極めて其の論あるべん。信を以て讃を讃んと謂ふ所高き念佛去あり。常の快しとおもへれど。かゝる病苦に責られたる更に去右の念佛。

その妻あへこと云ふ尼僧ありけり。清き祖の宗に到まぬ此ことを告て云ふ。

信の功力をもて。その病患を癒やまと願ふ清ふ。祖ことを受ひいと安きことなり。

畢竟渠が病癒ふ者也。こと傍法の罪業あり。宗教ふことを得ず。と更に背ひの者。

正法を以も明を云。その病ひ平快せば。忽地宗を改め。戴髪の者ふとうきん。こ成りん

愛憐を垂て救ひ給へと丐ふ。言祖然らべと誠ひ給ひ法を祝ふ人ふ果して

十羅刹女の妻ふ。かゝる祖枕方ふ在り。見く念誦ふ人ふ。苦悩遽ふ去ぬ。

食を與ふ味ひを得首を撫ふ。ふ去ぬ。

らんふ及ぶ妻ふ。遂ふ。こもまこ。義ことだり。繁くまでふ。悦びの眉を開きけり。若て

朝ふ高祖ふ對ひ恭敬礼拜ているやう。在ふ師ふ問て忽穢法師ふ師ふ教て法を受ること実ふ生ふの徴倖あり。今師を見ること希有のわ。係劫供養ることも報

がたし。便一邑を刹て高祖ふ寄附。即受戒唱髮せり。若ていそく。あの年。我海中ふ光

を視る。網を下して試るふ。ふ像の釋迦佛を得たり。その比ふ阿弥陀を念ずることを。東ふ

伝のふる。その後ふ捨おきる。今法華ふ帰しぬ。ふ師ふ祝ふ。忽ふ

らば。然れども復ふ我ふ在ふ惟一家のこと。師ふ在らば天ふ利せん。如ふ

護持のへんやとふ祖ことを問ひ。奇ふ

窟。まこ傍法の地ふ祝ふ。ふ実ふ廣宣流布の場ふ。我傍法去の徳云ふ

羅りふ貶編せることを。ふ妻ふ号ふ像を拜ふ。妙法の徳偶

法ふ。頻りふ感嘆せることを。朝高かの像を。一茶く。ふ祖ことを拜しの。

語るが如く。昔ふ如くことを。ふ侍ふ生ふ。ふ生ふ。

ハ。世ふ陸ふ佛とふ。ふ。かゝて朝ふ佛像の出現せる地ふ。

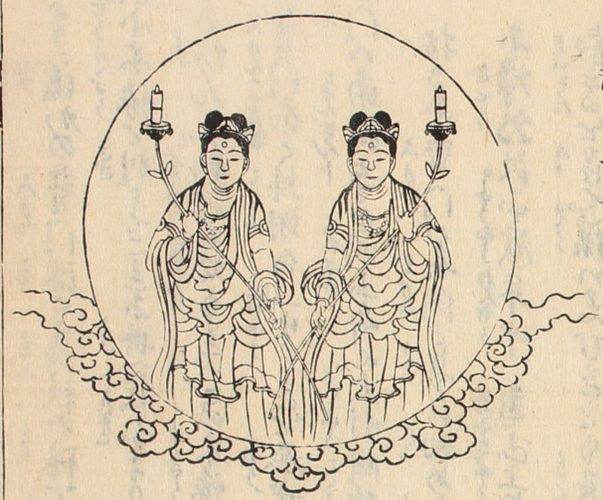
海上山佛現寺と号し。宗を禪宗普門と号あり。常に日天を拜し給ふ。一朝日蝕の中に二菩薩の出現せるを親欽喜して自分畫し。年来匣に秘蔵し今年内公つてこれを持来し。宗祖に奉る。宗祖これを悲眼と名ずけ給ふ。高祖拒このみとなく悲眼して授けあり。普門大に歎びて恭敬稽拜のあまりこと甚しく。爾あり悲眼を請んと乞ふに異僧忽焉として現ぜり。関東の流人日蓮なり。この悲眼を請べしと乞へば姿消ぬ。普門心中に怪しと思ひて年月を過るに果して宗祖の所へ飛来のよし及び往昔のことを思ひ出し。依て悲眼を請ふ。まさしく因あるべしや。禪家の普門ならずして傍法の徒と云へども。宗祖稽首あるべきなり。悲眼して異へらる。普門歎びのあまり文を作て一紙に書し。長く法宝の徒に示せり。その云ふいはく

一輪二尊之像者余奉侍金烏尊天之朝。日輪光明中。本地尊影現是則日月一體陰陽一致之根元也。故取筆謹書寫之。異僧来曰日輪開眼開東流人釋子日蓮云。今茲弘長元年辛酉六月六日。伊豆國伊東配流下開眼之秘寶藏納永家門ノ之寶物也

南禪寺沙門　普門

弘長元辛酉七月八日

其の紀事今彼家に藏せり。



まこと日輪中二菩薩出現せ。普門自此擇。宗祖開眼し給へ國去る祀也

弘長元年辛酉六月日

南禪寺　普門筆　朱印有之

日蓮　在判

これより後かの普門深く高祖の徳を伝えて慇懃懇切なりけるとぞ。祖もまた感じ給ひ小木像を刻みてこれを與へ我素より定處なし。武州の東に在りまして所作なりと常に訪ねて勸めの妨なるべし。若我を思ふ時きたりこの像を看よと。普門恭く拝謝の一生これを奉ぜしとぞ。この像今江戸浅草長谷寺に蔵すとぞ。

普門は南禪寺の開山なれば大明國師とぞ号す

按ずるに普門は長岡と号す。初め東福寺にあり。宋に入り後宇多天皇弘安三年に帰朝し正應年中亀山上皇嵯峨山の離宮にあり。この宮妖怪多し。南都の叡尊を召して禱らしむ。叡尊退いて普門を召し。普門これに居して妖魅退く。上皇これより心を宗門に傾け。南禪寺の開山とぞ。大明國師と謚し佛心禪師と号す

日蓮上人一代圖會卷之二終